

女子にバレずにおちんちんを出すチャレンジ

五月の昼休み、三年二組の教室はいつものように賑やかだった。窓から差し込む暖かい日差しが、教室の机や床を明るく照らし、女子たちの楽しそうな笑い声が響き合っている。教室の前の方では、クラスの人気者でリーダー格の彩花が、親友の美咲と真面目な梨花とお弁当を広げてワイワイ話している。彩花は長い黒髪を時々指でいじりながら、「この週末、カラオケ行くんだよね！」と元気よく話す。彼女の白い制服のブラウスは少し汗で湿っていて、動きに合わせて軽く揺れる。美咲はポニーテールを揺らしながら、「え、誰と！？ めっちゃ楽しそう！」とキャッキヤ笑い、ピンクのハンカチで口元を押さえる。梨花は静かにタコさんウインナーを箸でつまみ、「ふーん」と小

さく相槌を打ちながら、時々ノートに何かメモしている。

教室の後ろでは、男子たちがトランプで盛り上がったり、スマホでゲーム動画を見てゲラゲラ笑ったりしている。そんな中、教室の後ろの窓際の席で、翔太、健太、悠斗の三人組がひそひそと顔を寄せ合っていた。この三人はクラスの有名なバカ男子トリオで、いつもくだらないことで騒いで先生に怒られるのがお決まりだ。翔太はサッカー部で、日に焼けた顔に白い歯を見せてニヤニヤしている。健太はメガネをかけた頭のいいやつだけど、バカなことにはめっちゃ熱くなる。悠斗はバスケット部で背が高く、普段はクールなふりをするけど、実はけっこうビビりだ。今日、彼らの目はキラキラ輝き、口元にはニヤニヤした笑みが浮かんでいる。彼らはとんでもなくバカで危険な計画を立てていた。

「なあ、健太、ほんとにやるんだろ？ ビビってねえよな？」翔太が声を潜めて言う。健太はメガネをクイツと上げ、「ビビるわけねえ！ 俺が一番先にやって、伝説作るわ！」とドヤ顔。悠斗は少し離れた席で腕を組んで、「マジかよ...バレたら即退学だぞ。彩花の目、ガチで怖えから」と心配そうに言うけど、健太は「ビビってんじゃねえよ！」と笑い飛ばす。

彼らの計画は「女子にバレずにおちんちんを出すチャレンジ」。ルールは簡単だ。女子の近くで、誰にも気づかれずにズボンのチャックを下ろして、おちんちんを一瞬だけ出す。誰が一番大胆な場所で、バレずにできるかを競う。バレたら、彩花の冷たい視線や美咲のギャーって悲鳴、梨花の静かな怒りが待ってる。それでも、このスリルが彼らにはたまらなかった。バカで、危なくて、でもなんか青春っぽい——彼らはそう思った。

まず最初に動いたのは健太だ。彼は席からゆっくり立ち上がり、教科書を手に持ってカモフラージュする。心臓がドクドク鳴って、手のひらは汗でベタベタだ。教室の前では、彩花が美咲と梨花にカラオケの話をしていて、彩花の声は大きくてハキハキしてる。美咲は「え、マジで！？」と笑いながらポニーテールを揺らし、梨花は弁当の卵焼きを小さく食べてる。健太は教卓の近くまで移動し、教卓の影に隠れるように立つ。教科書をパラパラめくるふりをして、左手でズボンのチャックをそっと下ろす。ジジッって音がするけど、教室のガヤガヤで誰も気づかない。

健太のおちんちんは、普段は柔らかくて縮こまってるけど、緊張でちょっと硬くなってる。色は薄いピンクで、長さは4センチくらい。ズボンの隙間から、ちょこっとだけ顔を出す。陽の光に当たって、ほんの一瞬キラッと光る。健太は教科書を胸にギュッと抱

えて、彩花がこっちを見ないかチラチラ
チェックする。彩花がふと目を上げた瞬間、
健太は「うわっ！」って心の中で叫んで、教
科書をグッと握る。でも、彩花は美咲の「誰
と行くの！？」って声に釣られてすぐそっち
に戻る。健太はホッと息を吐く。